

帝国主義の腐朽性に抗し  
共同反革命を蜂起-内戦へ!

共産主義者同盟 (戦旗派)

# 戦旗

9月5日  
5日、20日発行  
407号

1部 100円

編集発行人 鹿島 昂

購読料 1部 20回 2600円  
(郵送料含む)

戦 旗 社

東京都新宿区新宿5の2の9  
コーポハッピービルE1号  
電話 03 (356) 2982  
振替 東京7-26110

## 9・16三里塚へ総決起せよ

日帝大平による、戦争への  
国民動員をうち破る秋期政  
治決戦に勝利せよ!

全国の同志・友人諸君!

日帝大平は、臨時国会の九月三〇日召集―解散・総選挙への道をつ走りはじめた。大平は、秋以降現実化してくる難題をのりきる自信を失い、総選挙による新体制をもつた戦争への国民総動員、八〇年代国内体制の打ち固めに入ろうとしているのだ。安保―日韓体制の戦争体制への転換をなす八〇年代防衛二法改悪、戦争を人民の窮乏でまかなう増税、天皇かつぎ出しによる反革命国民統合はその裏で着々とすすめられている。沖縄では戦後最大の米軍上陸演習が展開されている。

われわれは、七・二八戦旗派政治集会において、このような日帝大平の策動と真っ向から対決し、狭山・三里塚を頂点にあらゆる闘う人々との結合を深め、大平による戦争への国民動員をうち破り、八〇年代革命運動の展望をきりひらくべく、闘う全党の意志を結集してきた。

七九年秋は、七〇年代から八〇年代への重大な結節点であり、総選挙を媒介とする大平の国民動員、政党・労働戦線の右翼的再編に対決する政治決戦である。

ニカラグア革命の勝利、イラン情勢の再度の流動化、米帝による中東和平の行きづまりとい



80年代闘争への決意も高く、全国710名の総結集で  
戦旗派政治集会をもちとる (7・28 代々木八幡区民会館大ホール)

9・16

三里塚空港廃港・二期工

事阻止全国総決起集会

正午 三里塚第一公園 / 主催 三里塚反対同盟

た世界の激動の中で、韓国では8・11新民主本部への機動隊乱入をきっかけとして政治的緊迫度を増している。このような国際階級闘争の激化に呼応し、全人民と共に八〇年代を戦いとうるではないか。韓国民衆の決死闘争に呼応、朝鮮侵略反革命を打ち破る革命党・革命勢力への飛躍を待ちたい。

### 日帝Ⅱ大平による戦争への国民動員と対決し、秋期政治決戦に勝利せよ!

今秋期闘争をたたくにあたって、われわれはまず総選挙をめぐる動向、日帝大平の動きについて見ておかねばならない。  
東京サミットをもって福田からひきついだ懸案の処理を十成終えた大平は、九月解散総選挙によって自前の内閣・党の新体制を築こうとしている。一方では、春の統一地方選で公明・民社を抱きこみ、一定の復調をみたものの、他方で秋以降の石油、インフレ、高物価、増税、防衛二法改悪など山積する難題をのりきつていく自信がないからである。昨年十二月、幹事長人事をめぐる福田派の横槍で大平首相指名が一日遅れたことや、今年度予算案の委員会否決―本会議可決といった事態をくり返すわけにはいかない。とりわけそれは増税について言える。

今年度、国債は予算の四〇%、一五兆円に達し、発行残高は税収の三倍、五十九兆円である。国債費調達のための国債発行という悪循環に陥り、財政インフレを招くから増税で対処するというのが大平の言い分だ。だが、成長維持のために赤字国債を発行し大資本をもうけさせたツケを人民に払わせるこの増税に、一体誰が賛成するであろうか。大平はこのような難題をいくつも抱えているのだ。  
だから総選挙で大平が得ようとしているものは、**第一に、自民党の最大最強派閥にのりあがり、主流派として安定すること、次期総選挙での再選を確実にすることである。**実際元議員・新人候補の中では大平派が圧倒的に多い。

**第二に、国会における安定多数の獲得である。**衆議院(定数五一、現員四九二名)の自民党は現在二四八名で、かつて過半数を制しているにすぎず、与野党逆転の委員会も多い。委員会でも過半数となりうる安定多数二七一名の確保は今後の国会のりきりに絶対必要とされているのである。

**第三に、野党に対して政策の選択を迫り、中道勢力のより一層の翼賛化、抱きこみをはかることである。**こんにち帝国主義にとり政策選択の幅はせまられており、中道もまたそこに巻きこまれる以外にない。新自由クラブの分裂は決して偶然のことではないのだ。

こうして確立されんとしている大平新体制がより根本的こめざしているものは、革命と戦争の八〇年代を見すえた、戦争―非常事態への国民総動員である。

大平は昨年末、日本帝国主義の生き残り戦略として野村総研など下形を取りつづつあった総合安全保障戦略と環太平洋圏構想をひっさげて登場した。

総合安全保障戦略とは、政治・経済はいうまでもなく、社会・文化・教育など生活にかかわる一切が国家の安全保障に結びつくということである。国家のために国民はあらゆる協力をせよという。今夏の省エネ作戦が生活の全分野に及ぶのだ。六〇年代後半以降、侵略反革命体制づくりとして進められてきた

さまざまな帝国主義的再編の攻撃が、軍備を中心として全体としての関連性のもとに進められる。いかえれば、生活の隅々まで人民を支配せざるをえないまでに体制的危機が深まり、自衛隊の実戦部隊化が早急に迫られている。環太平洋圏構想は対外的なその具体化であり、衰退してゆく帝国主義の延命をかけた世界支配のまき返しを分担しつつ、アジア・太平洋圏に資源と市場、経済危機の転嫁先を確保し、支配し続けることをめざしている。

つまり、国内的には支配の強権的再編を強め、対外的には侵略反革命を一層展開していくことというのだ。その中心をなすものが「戦える自衛隊」づくりであり、戦争への国民総動員である。**「総合安保の根幹は軍備」**(大平首相)「3・18防衛大卒業式」なのだ。現に大平は、防衛大綱見直し、防衛庁長官の訪韓、五次防衛などを積極的に推進している。その矛先は韓国・東南アジアに向けられており、帝国主義の共通戦略の一環を形成している。しかし、その進め方は福田のような一点突破ではない。石油・財政などの危機をとらえ、総合安保や政策選択といったからめ手で野党・労組を抱き込み、国民的合意をデッチあげ、戦争―非常事態への総動員を実現しようとするものだ。もちろん背後で、官僚的・警察的・軍隊的権力への転成が進められることはいうまでもなく、大平の手法はそれによって保障されているのである。

その点を端的に示すものが、八月七日なされた「地震防災対策強化地域」の指定・公示である。昨年十二月十四日施行された大規模地震対策特別措置法による初めての指定で、「世界でも画期的」といわれ、静岡中心に六県一七〇市町村が指定された。ところが肝心のカネと力がない。財政的裏付けもなく、業務は各省庁バラバラのまま。その結果するところは自衛隊依存であり、その下での民防組織づくり、すなわち国民が自衛隊に協力し依頼する以外ないこととなる。地震法を言い出したのが防衛官僚エリート久保拓也であってみればそれは当然といわねばならない。

他方、地震立法への野党の反応はきわめて鈍かった。天災の次は石油、資源と市場、そして海外の権益、邦人へと拡大させ、朝鮮・東南アジアへの自衛隊派兵に対する国民的合意をねらっているのである。こうした政策を「八〇年代に向けて強力に推進する」(8・23斎藤幹事長)ためにこそ総選挙・大平新体制づくりは策動されているのである。

したがって、われわれはこの秋のたたかいは、何よりも総選挙を突破口にした大平の新体制づくり―戦争への国民総動員に屈服してしまふのか、断固たる反撃の一大人民決起をつくり出すのかを問う一大政治決戦として必ず勝利しなければならぬたたかいである。

この秋、潮流的分岐は一層鮮明なものとなる。公明・民社は自民党との結びつきを強め、社共は中間主義化していくであろう。更に、労働戦線の右翼的再編が民間主導―官公

労の孤立化として一挙に再浮上してきている。こうした中で、日本帝国主義の抑圧・差別・犠牲転嫁への怒りの中でこれら野党に失望した人民大衆は、被抑圧民族人民の解放をめざす政治勢力の登場を望んでいるのだ。いな、狭山・三里塚をはじめとする人民のあらゆるたたかいは革命的な人民の政治勢力を形成しうる条件を全国至るところにつくり出しているのである。

このような階級的激動のなかで身をもって闘い学び、日帝大平による戦争への国民総動員と対決し、全人民とともに八〇年代革命闘争の展望を戦取すべく、秋期政治決戦としてたたかひぬくこと、これが今秋期闘争の第一の任務である。

### 決戦段階をむかえた狭山・三里塚闘争の必勝を期し、9・16―10・31へ総力決起せよ!

狭山・三里塚闘争はすでに決戦段階に突入り、戦争への国民動員Ⅱ城内平和を策する日帝大平との熾烈な攻めぎ合いに到達している。森山は「第二の対話攻勢で反対同盟の分断、革命の拠点破壊にのり出し、四ッ谷は相次ぐ石川氏無実の新証拠を前に再審棄却の機をうかがっているのだ。

まさにこうした決戦段階をむかえた狭山・三里塚闘争の必勝を期し、九・一六―一〇・三一への全人民的総決起をかちとること、これが今秋期闘争の第二の任務である。その際確認しておかなければならないのは次の三点である。

**第一に、狭山・三里塚闘争は七〇年代を牽引した二大闘争であり、われわれ自身多くを学び主体を強化する糧でもあったということである。**差別と暴虐、死刑という極限状況の中から決起し、石川氏の敢闘精神と部落大衆の自立自闘のたたかい、あるいは闘魂必成を叫び大地にへばりついてたたかう農民の姿は全人民の魂をゆさぶり、広大な戦場的決起をつくり出しできた。それはまた、部落大衆・農民などの利害を実践的に守りぬくことによつてはじめて労働者階級は全人民の前衛たりうることを、総評民同の本王主義は結局階級協調に転落することを示したのである。

**第二に、したがってこの秋、狭山・三里塚闘争は八〇年代を見すえた日帝大平と人民との政治的攻防の最大の環だということである。**日帝は八〇年代城内平和のため全国の反基地・反原発などの住民闘争、反差別闘争の頂点に立つこの二大闘争を何とか鎮圧しようと術策を弄し、再審棄却や強制収用をちらつかせている。これを粉砕し、このたたかひに勝利することを通じて、八〇年代における全国全人民のたたかひもまた展望が切り開かれていくのである。

**第三に、八・九上告棄却、五・二〇開港後におけるわれわれの取組みの不充分性を克服し、狭山再審、三里塚廃港の現実性を戦取すべく、攻勢的に、可能なあらゆる機会と手段をもって人民の決起をつくり出し絶対に勝利する決意と覚悟で奮闘しなければならぬ。**石川氏を先頭に、十数年前という困難の中で新証拠の発掘を続けている部落大衆や弁護団、あるいは木の根用水を築きあげた三里塚農民に込めぬく九・一六―一〇・三一の大決起をかちとろうではないか。

### 9・16三里塚現地大決起で「対話」攻撃粉砕、廃港へ進撃しよう!

七・一六森山発言を契機とする「第二の対話」攻勢、それに連動したマスコミの反対派動搖キャンペーンと、三里塚反対同盟への攻撃が強まっている。同盟は対話拒否を宣言し、「九・一六にきてわしらの決意をみてくれ」と全国に檄を發した。九・一六の圧倒的成功こそは、対話攻撃粉砕―廃港への決定的カギである。広く深く人民の中に入り、全国からの

総結集、同盟との団結をかちとろう。  
 九・一六闘争をわれわれは、第一に二期着工もくろむ「第一の対話」攻撃と対決し、廃港の実現に向けた決戦段階としてたたかいかねなければならない。

第一の対話が、3・26敗北をとりつくり5・20安全開港を策すものでしかなかったのと同じく、今回の対話は妨害のない安全空港二期着工をめざしている。違いは、大幅赤字、燃料確保の困難性や羽田拡張案などをかかえて、政府・公団が二期即時着工をたてきれないこと、とりわけ、飛行機を飛ばしながら着工した場合の困難性である。まさにそれゆえにこそ、政府・公団は同盟内の分断、同盟と全国人民との分断に全力を注いでいるのだ。カネと強権でおどしつけ、農民を騒音地獄の下におき、多くの戦士を獄中にぶちこみ重罪を課さんとする権力がそれ以外の一切をめぐらすというのか。

他方、この対話攻撃をはね返し打ち砕くことよって、廃港勝利の展望は現実的に切りひらくことができる。そのような決戦段階として九・一六総力決起一秋期三里塚闘争をかちとっていかねばならない。  
 第二に、木の根用水建設の成果にふまえ、革命の拠点三里塚を全人民の力で守りぬぐべくたたかうことである。

七月二十二日二十四日、二期正区内の木根に巨大な風車が建ちあげられた。くるくるとまわる風車は水をくみ上げ農地をうるおし、一層ゆたかな農を築く。「闘う農業」は政府・公団の成田用水・農業振興の美辞麗句を現実的に粉碎し廃港に追いこむ力だ。

木の根用水は、25における小川源さんの提起をうけ、同盟内での討論、全国への訴えを通じて、文筆連の同盟農民、全国支援勢力が心を一つにして建設したものである。森山発言一対話攻撃はまさにその完成の直前、この団結に楔を打ち込むものとしてなされた。しかし建設は着々と進み、ついに完成したのだ。われわれはこの成果をふまえ、反対同盟への集中攻撃を共にうけとめ、文字通り全国全人民の力で三里塚を守りぬかなければならない。九・一六現地へ、そして援農へ！農民の闘魂、気魄をしっかりとつかみとり、廃港への戦闘陣形を構築しようではないか。

第三に、管制塔戦士年内奪還をめざし、保釈金カンパ、保釈要求署名運動の突破口として九・一六闘争を打ちぬかなければならない。管制塔戦士水野・山下同志、事後逮捕された佐藤同志をはじめ多くの被告が未だ獄中にとらわれている。しかも花尻による月三回全日公判の強行で早期重罪判決の攻撃にさらされている。

もちろん彼らはこのような事態に失望することなく果敢にたたかいかねいでいる。被告家族も日々の辛さをのりこえて傍聴闘争、更に農民や息子たちの正義を訴え東奔西走している。守る会や支える会、管制塔公判に勝利する会も傍聴や花尻弾劾のたたかいを展開している。

われわれは、春に続き三里塚全被告年内奪還の一翼を担い、保釈金カンパ、保釈要求署名運動を総力をあげてたたかいたらなければならぬ。職場・地域・学園、至る所でこのたたかいをくりひろげていこうではないか。まさに、以上三つの内実をもって九・一六現地への総力決起を実現せよ！

差別・抑圧の強化と対決し、10・31狭山再審決戦につき進め！

八・九闘争は、五・二三以来の七十七日間わたる全国行進、七・二九千葉刑包圍闘争、八・六九狭山同盟登校のたたかいをうけ、一万人の結集でかちとられた。新証拠の相次ぐ発掘と大衆運動の結合が、日帝四ツ谷の早期棄却策動をはね返しているのだ。それは、「この暗夜の獄中にあるうとも真実は必ず勝つ強い確信のもとに勝利の日まで闘い抜く」というすさまじい石川氏の決意の勝利でもあった。

しかし、新証拠によって追いつめられていればこそ、四ツ谷は再審棄却の機を陰険にうかがっているのであり、われわれは臨戦体制で十・三一に至る過程をたかたかといくのでなければならぬ。「常に緊張と闘う厳しい姿勢なくして閉ざされた再審のトビラは開けることはできない」(石川氏)のである。

とりわけ、四ツ谷は再審申立て段階で寺尾が同じ高裁四部にいた関係で寺尾の判断をひきついでいることは確実であり、再審をどうするか決めるための事実調べすら行おうとしていない。無実であるがゆえに、たとえ十一年前という困難性があるうとも、新証拠はいくつも発見されうる。それをとつても再審開始を決定するには十分である。ところが「新証拠が出そろわない限り事実調べは行わない」というのだ。有罪棄却を前提にしているからだ。

同時に、人民分断策す差別・抑圧の強まりの中で、反差別闘争の頂点である狭山闘争への攻撃は日帝の全体重をかけたものであることも忘れてはならない。法務省は、六月十八日一単なる身元調べなら興信所を使うこともさしつかえなく、対象が同和地区でも被爆者でも問題にならない」として、実質上、差別文書「地名総鑑」などを容認、差別を正当化した。また、日教組によれば、来年度の小学校教科書はきわめて国家主義的である。「君が代」は国歌とされ大きなスペースがさかされた。極端なのは聖徳太子の扱いで、現行の三〜五倍も記述されている。太平洋戦争より三〜四倍も長い長きにわたる「生まれてすぐ口をきいた」十人が一度にいろいろな話をするのを聞きわけてすぐさま正しく答えた」など、現人神的な書きっぷりである。元号法制化、A級戦犯靖国合祀と首相参拝など帝国主義天皇制攻撃の強まりの中で、無実の部落民石川氏の獄死攻撃もますます激化しようとしている。

七月二四日、四ツ谷は弁護団に対し、日付などでの検察側意見を一月一〇日まで、その後弁護団への意見を一月一〇日までにきた。までということは一月一〇日にということではない、それ以前にも検察側が2・28同様の棄却要求の意見書を出してくる可能性は十分にある。これを打ち破り、事実審理・再審をかちとるべく、狭山臨戦体制を堅持し、一〇・三一へ突き進もう！

**朝鮮出兵打ち破る80年代闘争陣形の構築めざし、10・21反戦集会をかちとれ！**

この春、われわれは、日帝の朝鮮出兵策動を打ち破る八〇年代闘争陣形の構築めざし、その第一歩をふみ出した。狭山・三里塚はじめる闘う人々との結合をかちとり、全社会的再編と対決し、広範な人民と結合しうる豊かにかつ戦闘的な共産主義者への飛躍をめざしてきた。そして狭山全国実委、守る会、支え

る会や連帯する会の実体化、サミット粉碎に向けた6・23集会をかちとることができた。この成果を一層発展させ、八〇年代闘争陣形の構築めざし、秋期政治決戦の一大頂点として十・二二反戦集会をかちとること、これが今秋期闘争の第三の任務である。

十・二二に向け、まずみておかねばならないのは、在韓米軍撤退の二年間凍結発表(7・20カーター)後の一連の軍事動向である。その過程にあつては、①帝国主義の共通せる対ソ戦略への日帝自衛隊の組込み、②日米「韓」の軍事同盟化、③「戦える自衛隊」づくりが明確に打ち出されている。

七月二四日発表の「防衛白書」は、極東ソ連軍を「重要な関心事項」と規定し、韓国、台湾の軍事的重要性を強調、更に防衛計画大綱に定めた軍備の早期達成と大綱の改定、有事立法、日米共同作戦態勢推進をかかげた。

次いで、防衛庁長官として山下がはじめて韓国を訪問(7・24〜25)、また日本の現職閣僚としてはじめて三八度線や軍事訓練を視察した。盧国防相との会談では軍艦の相互寄港や軍事結合の一層の推進を確認した。

第十一回日米安保事務レベル協議(7・31〜8・2)では、米軍・自衛隊の今後十年間八〇年代軍備計画の方針を検討し、米緊急即応部隊の朝鮮派兵をめぐる協議も行われた。

八月六日、日米軍事関係の密接化の象徴として、これもはじめて横田の米軍司令部を訪れた山下は、八月一日、米・NATO本部の歴訪に出発した。山下ははじめて本格的に戦略核兵器を研修し、米核戦略へのかかわりを決定的に深めた。ブラウン国防長官とは日米合同演習を陸にも拡大することなどを、ブレジンスキー補佐官とは日米一韓一米韓の三角同盟が「アジア安定の中核」であることを確認した。また、NATO本部ではソ連脅威の共通認識、相互交流促進で一致した。

他方、西銘県政下で八月一日に自衛官募集業務の開始が指示された沖繩では、山下訪米と期を合わせるかのように戦後最大規模の演習が開始された。第七艦隊の半分(二六隻、二五〇〇〇人)、西太平洋の海兵隊の過半(一五〇〇〇人)、計四万人を動員し沖繩を強襲する大作戦「フォートレス・ゲール」(とりでの烈風、8・18〜9・1)である。

大平体制下でのこうした安保「日」韓体制の戦争体制への再編の急展開は、何よりも韓国情勢の強まる危機に規定されている。

八月一日、数百人のソウル市警機動隊が新民党本部に乱入、座りこみ中の女子工員一人を死に至らしめ、多数を負傷させた。座り込んでいたのは、四月に閉鎖されたかつら製作縫製会社YH貿易の従業員約一八〇名で、首切り反対、就職あっせんを求めていた。この暴虐きわまる弾圧に対し民主統一党も抗議ろう城に合流し、朴体制との緊迫が続いている。

韓国経済は七八年後半から深刻な不況に突入した。しかも五月に打ち出したインフレ抑制策は原油値上げで吹っ飛び、貿易収支の悪化、繊維・雑貨や組み立て工業の輸出競争力の低下はさげられず、倒産が相次いでいる。失業率は昨年を上回る四・二%、約五五万人と政府でさえ予測するほどの事態であり、YH貿易は氷山の一角にすぎない。そして失業問題は総力安下の韓国では政治問題に転化する。労働運動を重要な一翼とする反朴民主化闘争は朴体制を根底からゆさぶり、日米帝の支配と南北分断を打ち破る底力を秘めてきた。

かかる韓国危機への日帝の介入を打ち破るたたかいを、まさに日本労働者階級の責務としてつくりあげていくのでなければならぬ。

一〇・二一反戦集会の成功をかちとることはその意味できわめて重要なのである。

次に、われわれは、朝鮮出兵に向けた帝国主義天皇制攻撃—全社会的再編と対決する八〇年代闘争陣形をめざすものとして、一〇・二一集会をたたかいたらなければならぬ。

戦争への国民動員をめざす日帝大平は、野党・労組指導部の抱き込み、翼賛化に力を入れている。彼らをまるめこめば、政府に対する人民の不満を沈潜・分散化できると考えているのだ。そして石油や財政の危機を叫び、あらゆる犠牲を人民に転嫁しようとしている。だが、既成指導部の破産は六〇年代後半から七〇年代にかけてさらけ出されてきている。とりわけ日共は、狭山・三里塚をはじめ全国の戦闘的な住民、労働者、農民、学生、たまたかに敵対しており、悪質さは定評がある。社会党はそのあいまい性ゆえに一定の関係を保持しているものの、党としての指導性は喪失している。反原発・反CTSの住民闘争、全金田中、動労千葉、全通をはじめとする労働運動、全国至る所で戦闘的な潮流が生まれてきている。昨年七月には日産宇都宮工場での一人の労働者の事故死をきっかけとして七千人の労働者が抜き打ちストに決起、帝国主義労働運動の足下も強固ではないことを示した。われわれは、こうしたたたかおう全人民と結びつき、日帝の朝鮮出兵に向けた社会再編の攻撃を共に打ち破る闘争陣形をつくっていかなければならない。

最後に、われわれは戦旗派の全人民の党への飛躍をかちとるべく力を合わせて奮闘しなければならぬ。

われわれは今年前半期においては、人民大衆の実存に学び内在的連帯をかちとるべく、狭山全国実委の大衆の内実の形成や「たたかう農業」めざす木の根用水建設への積極的参与をなし、あるいは被告家族との交流、地域・職場・学園でのたたかいないなど、政治的枠を拡大もしてきた。八〇年代闘争陣形構築へ向けた第一歩である。

今秋期においては、更なる前進のために、各レベルにおける政治討論の深化、活発化をかちとり、党としての計画性、組織性、ひいては指導性の強化をはかっていかねばならない。

たたかいはの広がりの中で、これまでの原則を同じく堅持しようとしながらも、具体的対処において判断の違いや意見の隔たりが出てくるのは当然である。それは党的にも個人的にもそうしたたたかいは人民大衆の持つ多様性や要求される具体性に応えうるだけの政治経験や知識が欠けていることの表れにほかならない。そのような現実の中で、「三つの原則・四つの規範」にそくしたたたかいは具体的にどういうものか把み取れていないのである。このようなわれわれの歴史性やそれゆえの不充分性がふまえられなければならない。

たとえば、この春、守る会・支える会の大衆的実体の形成をなそうとした時、それが労働中心であることの問題に直面した。しかし、多くの活動家にとって未経験である以上、そのような出発は当然だったし、

またそれによって家族との関係や保釈金づくりも集中的になされてきたのである。そこで少しづつ経験を積み、会員拡大や公判傍聴などの支援活動の具体的展開の中で、われわれは会の内実を形成していく以外ではない。地区での活動も同じことがいえる。

自らの歴史性にふまえ、しかもたたかいはの枠を広げていくためには党としての計画性、組織性がこれまでになく大切であり、各レベルにおける実践にそくした政治討論の深化がなされていかねばならない。党の指導性が強化されねばならない。そこにおいては、石川氏や三里塚農民、金芝河のようなあくなき敢闘精神、たえざる努力が必要なのだ。われわれは、現実の多様性、具体性との格闘を通じ、あくまでも被抑圧民族人民の利害に徹し人民大衆に依拠してたたかう全人民の党への戦旗派の飛躍のために刻苦奮闘し、がんばらなければならない。

全国の同志・友人諸君！  
今秋期闘争の三つの任務をしっかりと把握し、八〇年代の展望を切り開く秋期政治決戦に勇躍決起せよ！  
日帝大平による国民の戦争動員、野党・労組の大政翼賛化を粉砕する全人民的な激動をつくり出せ！  
韓国民衆の決死闘争にこえ、朝鮮出兵ならう八〇年防衛二法改悪を阻止せよ！

# 7.28政治集会

## 80年代闘争へ向けた

### 戦旗派の戦闘宣言を再発せよ

#### 広範な人民決起つくり出し、

#### 日帝の戦争策動をうち破れ！

全国のたたかう仲間みなさん

七・二八戦旗派政治集会は、迫りくる八〇年代の激闘を見すえ、この重大な階級的責務に応えるべく、戦旗派の戦闘的方向と戦闘宣言を全党全人民の総意を結集してかちとった。

会場の代々木八幡区民会館には、全国の労農学七一〇名が結集し、終始緊張と熱気の中で集会はうち抜かれた。

**樋口氏、80年代に向けた青年労働者の決起を訴える！**

午後六時半、司会に立った佐脇同志は、「八〇年代に向けた戦列をうち固める集会としてかちとろう」と高らかに開会を宣した。

連帯のあいさつの初めに、『労働情報』の樋口篤三氏が立った。割れるような拍手と真剣なまなざしの中で樋口氏は、まず現在の同盟・JCによる労働統一、更には「共産党の大躍進で不景気を克服しよう」と言う日共の反動性をきっぱりと批判した。そして「眠れ

る獅子が眠れる豚かといわれた労働運動に転機がきている」と語り、大阪全金港合同や七尾漁民と共に決起した北陸電力、原発反対をたたかう電産中国など「労働者のたたかいは変化がおきている。住民運動、農民運動、三里塚のたたか

いに励まされている」起こりつつある戦闘的労働運動、三里塚・狭山、そして南朝鮮の労働者と結びつきたたかいはつくりたい」と熱

をこめて訴えた。

今春期のたたかいはを通じ、われわれは日帝大平の戦争に向けた全社会的再編との対決を地域・職場・学園においてつくり出すべく奮闘してきた。樋口氏の発言はこう

したわれわれのたたかいはの重要さを改めて確認させるものであり、参加者は「皆さんは若いのでこれからが楽しみだ。私もがんばるの

で皆さんもがんばってほしい」という樋口氏の訴えに大きな拍手でこえ、共にたたかいはの決意をうち固めていったのである。

**ゆるがぬ廃港の決意示した島村氏**  
—解同埼玉県連青年部もアピール  
次いで、三里塚よりかけつけた

東峰の島村さん、辺田の瓜生あいさんが登壇した。満場の大拍手をうけて島村さんがあいさつする。

「今月になって森山は二期仕事を凍結して話し合いを進めたいと言っている。話し合いというなら私らが十三年前陳情をしたとき彼らは何をしたのか、シャッターをおろして居留守をつかってあわな

かった。そしてあらゆる暴力をふるって5・20開港をやった。」

語気を強める島村さんは、「本場に話し合いをするなら滑走路を緑の大地にすべさだ、われわれは話し合いを絶対に認めない」と言い

きった。大きな異議なしと拍手がまき起る。更に島村さんは、大木よねさんの家と畑を奪った第二次代執行の蛮行、成田用水のぎま

# 80年安保粉碎！狭山・三里塚決戦勝利の展望をきりひろく

# 秋期政治決戦への進撃ちかう

ん性に怒りをぶつける。そして「十三年間のたたかいで彼らの心の底根を見抜いている」と確固とした廃港の決意を訴えた。

この三里塚農民の不屈の決意の表明に続いて、解放同盟埼玉県連青年部のアピールが読みあげられた。アピールは、あくまで事実調べを拒否する高裁四ツ谷、そして支配者共による地名総鑑、全国各地でひんぱんに起こる差別落書、元号法制化に怒りを燃やし、7・29千葉刑包囲糾弾、八月同盟登校、8・9決起の攻勢的發展をかちとろうと訴えた。

こうして集会は重大な決戦的段階を迎えた狭山・三里塚の現局面を緊張をもって受けとめ、この決戦に絶対勝利する不拔の決意を満場を確認していったのである。

## 戦旗派の80年代に向けた戦略的方向をさし示す

集会の熱気がいやが上にも高まる中で、笠置同志が基調報告にたった。

同志はまず「戦旗派がこの七〇年代において結成され、韓国民衆・三里塚農民・部落大衆に学び応えようとし、十年間を闘いぬいてきた。これにふまえて、いまこそわれわれは八〇年代に向けていかなる方向と内容で闘っていくのかその核心を本集会においてかちとらねばならない」と集会の位置を鮮明にした。

そして、三里塚農民、部落大衆、戦闘的労働者との連帯をめざし、われわれ自身のこれまでの政治的枠の狭さをのりこえて、たたかう人民との結合をめざしたこの春のたたかいをひきつぎ、八〇年代をめざしたたたかいの任務を提起した。

すなわち、第一には、イラン・ニカラグアをはじめ前進する第三世界の決起に応え、これに対する帝国主義のまき返しを蜂起・内戦・革命戦争でうち破る革命党への飛躍をたたかひとすること。

第二には、ベトナム・中国・カンボジアの軍事対立を国際共産主義運動の対立と分岐のあらわれとしてとらえ、これを止揚するプロレタリア国際主義の内実をつくり出していくこと。

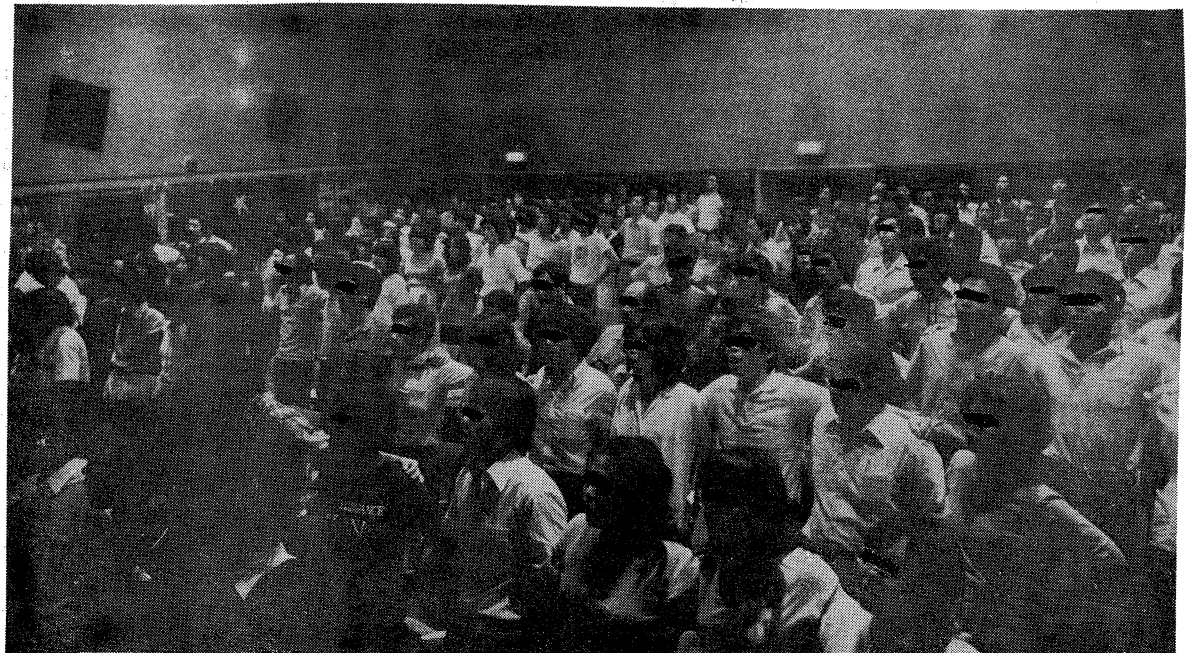
第三には、日帝大平の八〇年代戦略と対決する八〇年代闘争陣形の構築をめざし、その中核体としてたたかひぬくこと。

この三点の任務を明らかにし、八〇年防衛二法改悪から一挙に戦争への国民動員をめざす日帝のあらゆる策動と全面対決しぬく同盟の断固たる決意を明らかにしたのである。

## 守る会・被告家族の訴えをうけ、管制塔戦士奪還の決意固める！

八〇年代に向けた戦旗派の戦略的方向を全体で確認した後、三里塚闘争へのカンパ、そして、管制塔三戦士の獄中アピール、「水野・佐藤君を守る会」からのあいさつ、水野さん、佐藤さんの家族のあいさつが行われた。

水野・佐藤・山下同志の元気の獄中アピールに続いて、水野さんのおかあさんは、自身の戦争体験を語られながら「戦争なんか起こさせるとは絶対にさせちゃならない」と訴えられた。そして「息子は元気だと言っているが体はやられていふなあとと思う。反対同盟の皆さんにも力を出してもらって、みなさんの体あたりで何とか保釈をかちとれるようにしてもらいたい」と述べられた。



80年代への戦略的方向を全体でがっちりうけとめる  
(7・28 代々木八幡区民会館)

の奪還を何としまかちとる決意を新たにしたのである。

## 80年代のたたかひのとびら開く秋のたたかひへの進撃ちを決意！

集会は、最後に学共闘、労共闘の決意表明をうけた。学共闘の西城議長は、「八〇年代闘争陣形を担う日本学生運動の再生をめざしてたたかひたい」と清らかな決意をきっぱりと表明した。

労共闘の立原氏は、「この秋は八〇年代へのたたかひのとびらを開く重大なたたかひであり、断固としてかちとる」と宣言し、9・16三里塚、8・9・10・31狭山再審決戦、そして10・21安保・日韓闘争への総決起を訴えたのである。

こうして集会は、終始熱気に包まれる中で、何よりも八〇年代闘争に向けた革命党への飛躍の決意をかちとり、第二には、激化する朝鮮出兵策動と対決する広範な人民結集をめざしてたたかひ、第三には、重大な決戦段階をむかえた三里塚・狭山への総力決起の意志をうち固めたのである。

七・二八集会でうち固めた決意を物質化すべく、秋期政治決戦への進撃をかちとり、八〇年代闘争の勝利の展望をきり開こうではないか！



被告の早期奪還を訴える  
水野君のお母さん

8・9

# 上告棄却許さぬ八千のスクラム

## 高裁を包囲し、再審を迫る

### 全国実委の旗の下、再審決戦に進撃せよ!

八・九最高裁不当差別「上告棄却」二カ年糾弾・狭山再審要求中央総決起集会が、日比谷野音を埋めつくす八千余の部落大衆・農労学の結集の下、成功裡にちちられた。

解放同盟先頭に対高裁闘争をうちぬく!

この日、本集会開始前から続々と結集した部落大衆は、再審棄却をもくろむ高裁・四ッ谷に対して事実調べ―再審開始決定を求める要請書をたたきつけた。中央本部、各県連代表の四ッ谷への要請書の手渡しに対して高裁側はこれをつっぱね、これに抗議して要請団が高裁前にすわりこんだのを合図に部落大衆・支援が続々と高裁に結集し、包囲―糾弾のたたかいを貫徹した。この行動に驚きあわてふためく機動隊を振り目に、規制網をうち破って解放同盟員が次から次に高裁へかけつけ、「再審を開始せよ!」のシュプレヒコールを投げつけ、これに呼応して公園入口にかけた支援部隊も共にシュプレヒコールを上げ、対高裁包

囲―糾弾のたたかいを実現した。再審棄却にできれば、大衆的実力行動でたたかう!

対高裁闘争をかちとり、午後一時から本集会が開始された。「狭山差別裁判打ち砕こう」が大合唱され、主催者を代表して松井委員長が「狭山はウソとデッチあげで進めてきている日本の裁判を暴露してきた。いかなる困難があろうとたたかう」と決意を述べた。野本中執は、機動隊の妨害をはねかえして要請文を高裁・総務課長に手渡したと報告し、「もし棄却されるならば、なみなみならぬ決意と大衆的実力行動でたたかう」としめくった。

次に基調報告にたった西岡中執は、上告棄却以降のたたかいをふりかえり、八・九棄却後、たたかいは一時停滞したが、三四回大会決定にもとづき五・二三の五万人大結集を実現しぬいたこと、対高裁すわり込み、全国行進、同盟登校、文化人の決起、弁護団の新証拠に関する意見書提出というたたかいの前進の中で、高裁四ッ谷は

七月二十四日の弁護団との接衝で、日付問題などで意見を檢察側に出示して期日を十月十日までとすることを確認したと明らかにした。そして、早期棄却攻撃を打ち破ったことを確認すると同時に、きびしい情勢のもと、十・三一に向けて大衆路線を発揮して檢察側意見書を打ち破ること、「自分の中にある石川、石川の両親は自分達の親」を常に心に刻みつけ、反権力・反差別思想で武装し再審闘争に勝利しようとして訴えた。

全国行進隊・子供会のたたかうけ、再審決戦への決意を固める

このあと、狭山弁護団、東京共闘、社会党、公明党、東本願寺があいさつ。三里塚反対同盟からは郡司とめさんが「共通の敵とたたかう」と決意、全障連の代表からは「狭山と障害者解放は同じ」というあいさつをうけた。

そして、七十七日間の全国オルグを行った全国行進隊十五名と、子ども会の代表が解放旗と横断幕をかかげて登壇し、次々と力強いあいさつを述べる。とりわけ子ども会の「石川さんの不屈の十六年のたたかいに学んで再審要求をかちとろう!」という訴えに会場全員の拍手がまきおこり、再審決戦への決意はいやが上にも高められた。

最後に石川氏のアピールが狭山支部の代表から読みあげられ、集会決議の後、清水谷公園へ向けた大デモンストレーションを敢行した。

7・29

### 荊冠旗を先頭に

### 千葉刑包囲闘争にたつ!

### 「石川さんを返せ」の声、獄壁を揺るがす

すべての同志諸君!

去る七月二十九日、千葉において、部落解放同盟関東ブロックを中心に、二千名の労学の結集をもって千葉刑包囲闘争がたたかいられた。集会場には関東各県連の荊冠旗がはためき、このたたかいにかけつけた千葉動労をはじめとする多くの労農学が、それを取り巻くようにギッシリと席をうずめてい

全国実委、10・31決戦への前進を誓う!

全国実委に結集した赤ゼッケンの部隊は、対高裁ハンスト闘争をはじめ解放同盟との団結の下、十・三一への決意を新たにうち固めつつ最後まで戦闘的デモを貫徹しぬいた。

八・九闘争におけるたたかいは、第一に、日帝・四ッ谷の新証拠打ち切り策動と対決し、事実審理―再審開始、石川氏仮出獄をかちとるべく、全国の部落大衆、労農人民が総決起したことであり、第二には、部落大衆の全国行進、集団登校という果敢なたたかいにこえ、対高裁包囲闘争をともにたたかい団結をうち固めたことであり、第三に、今春以来つみ重ねてきた狭山全国実委の運動を更に発展させるべく、十・三一を頂点とする再審決戦勝利めざして決意をうち固めたことである。

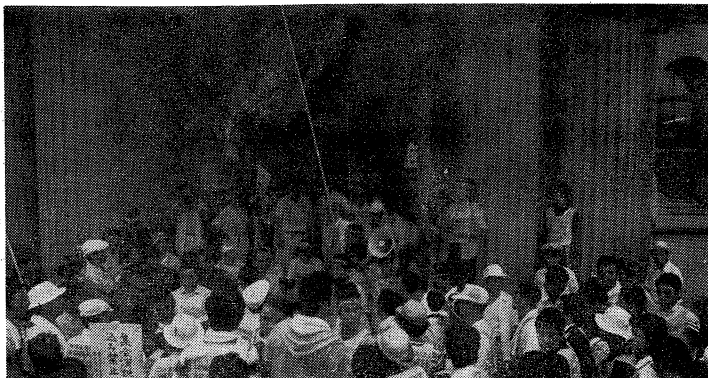
日帝大平の今秋期反動攻勢をみすえ、狭山再審決戦に猛然と進撃せよ! 石川氏奪還―狭山完全勝利めざして日帝大平のもくろみを打ち砕こう!

空港魔港、石川さん奪還まで 共にかんばろう!

集会は解放同盟千葉県連の力強い開会宣言をもって開始された。さらに関東ブロックよりの「大衆的実力闘争で一刻も早く石川さんをとりもどそう」という基調提起



部落大衆とともに高裁を包囲し、決起した全国実委 (8・9 日比谷公園入口)



解放同盟、事実調べ―再審開始の要請書をかかげ、高裁前にすわりこむ!

# 管制塔戦士奪還めざし、保釈金 カンパ・全国署名運動に起ちあがろう

がなされ、これをうけて各団体、各県連からの再審闘争勝利にむけた決意表明が次々になされていく。この中で発言にたった三里塚反対同盟・長谷川たけ婦人行動隊長は「三里塚では対話攻勢をはねかえし、団結を固めてがんばっている。空港廃港、石川さん奪還の日まで共にがんばりましょう」と高らかにその決意を明らかにした。集会は正念場をむかえた再審闘争を象徴するかのごとく、終始激

しいばかりの熱気をもって続けられ、シネプレヒコールをもって閉会した。  
さあ千葉刑に向けて進撃だ！

ス黒い千葉刑の壁を包囲していく。権力は千葉刑を包む怒りのシネプレヒコールに恐れをなし、各所に機動隊を配備して鉄条網の中からこそぞとデモ隊をぬすみ見ることしかできない。さらにデモ隊は千葉刑正門前を占拠して再々のシネプレヒコールを行い、何ともしも石川さんを奪還するぞ！というすさまじい気魄を、千葉刑にたたきつけていったのだ。

に決起したわが全国実委の同志達は、石川氏とともに獄中にある佐藤同志の姿を思いつつ、終始闘争的なデモをもってたたかいぬいた。同志諸君！再審闘争は、まさしく決戦段階にある。われわれは何としても東京高裁に再審を行わせ、石川氏をあの千葉刑から奪還せねばならない。今こそ全身全霊をかけて、再審闘争勝利をめざしたたたかいぬこうではないか！

## 檄文

全三救と開港阻止決戦統一被告団は、全三里塚被告と救援諸団体に檄を送る。

二期工事阻止・廃港をめぐる三里塚現地は重大な攻防の山場にさしかかった。早期着工を意図する政府は、強権による正面突破が重大な政治的危機を引き起こすことを恐れ、「おどしや甘言による切りくずし、話し合い路線のゆさぶり、騒音地獄による農民追い出し、農振策などによる同盟分断策動、農業破壊等々。」と（招請状―反対同盟）卑劣な策をろうしている。このなかでなお、全重圧をはねのけ欺瞞的話し合いを拒否し、「甘言にのせられることなくあくまで二期工事阻止へともに頑張りとおそう」と九・一六現地集会への総決起を呼びかけた七・一九幹部会声明に、三里塚救援運動の全成果を賭けて応えねばならない。

これらの動きと軌を一にして三里塚裁判をめぐる情勢も緊迫の度を強めている。管制塔・要塞十八戦士は、航空危険罪・殺人未遂罪の重罪攻撃を加えられ、いまだ獄中に囚われている。加えて、七一年仮処分判決にはじまり、星野君（七一年沖縄闘争）への八・二二死刑判決策動、更に、五・二〇第一グループへの八・二九判決・実刑攻撃、そして横堀・九ゲート・八ゲートグループへの年内結審攻撃と権力の意図をむき出しにした超超速裁判が強行されんとしている。

もはや、躊躇は許されない。一步も引くことのできぬ闘いの秋がきた。三里塚を離れて三里塚救援運動はなく、戦場で失ったものはいかなる交渉のテーブル・法廷でも取り戻すことはできない。全三里塚被告の保釈奪還・完全無罪・処分撤回という三里塚救援運動の三課題も、廃港決戦の勝利をとおし三里塚の大義が社会的にも打ちたてられるときにはじめて勝利するのだ。

全三救と開港阻止決戦統一被告団は、この重大な情勢に臨み、九・一六―一七連続闘争への全力を尽した取り組みを決定した。全三里塚被告と救援諸団体は全国家族会を先頭に、九・一六、三里塚空港廃港・二期工事阻止全国総決起集会（主催反対同盟）に大結集せよ／そして、全員現地泊り込み、翌九・一七、全三里塚被告の釈放・無罪・処分撤回にむけた、東京地裁包囲・中央官庁（運輸省・自治省・郵政省・電々公社・国鉄・都庁）に対する中央総行動に三里塚救援運動の全成果を賭けて総決起されることを訴える。ここが闘いの正念場である。

直ちに九・一六―一七連続闘争にむけた準備を開始せよ／残された時間は一ヶ月余、全三里塚被告と救援諸団体の奮闘を期待する。

一九七九年八月一〇日

### 全国三里塚救援連絡会 開港阻止決戦統一被告団

#### 公判日程

9月3日	管制塔	午前10時	東京地裁
5日	二月要塞	午後一時	千葉地裁
6日	八ゲート第2G	午前10時	東京地裁
12日	三月要塞第2・3G	午後一時	千葉地裁
同日	八ゲート第3G	午前10時	東京地裁
13日	三月要塞第1G	午前10時	千葉地裁
同日	5・20第2G	午前10時	東京地裁
同日	5・20第3G	午前10時	東京地裁
26日	管制塔	午前10時	東京地裁

9.17  
全三里塚被告の釈放・無罪・  
処分撤回・中央総行動

午前11時 日比谷小公園

主催 全三救・開港阻止決戦統一被告団

# 中南米解放に 火を放った

## ニカラグア革命



本年五月からのFSLN(サンディニスタ民族解放戦線)の猛攻によってきりひらかれたニカラグア内戦は、ついに人民による「米の憲兵」ソモサ打倒をたたきこいた。

本年二月のイラン革命にひきつづき、米帝世界支配の重要な一角が更に大きくつき崩されたのである。いまや全世界の被抑圧民族人民の高揚は明らかであり、その勝利もまた明白である。帝国主義者共の生きのびる道はあ

らゆるところで人民により断ちきられているのだ。

われわれは、ニカラグア人民の勝利が、ベトナム、アンゴラ、イランと同じ敵の支配を、同じような人民の戦争の決起によってたたきこいたものであることをはっきりととらえ、この人民の限りない勇気と血の犠牲によってひらかれた革命戦争の大道をわがものとするのでなければならない。

### 43年間にわたる「ソモサ王朝」が倒された

米帝の番犬ソモサ

日本の三分の一の国土、人口二五〇万のニカラグアは、二〇世紀初頭以来米帝の占領と、その忠実な番犬ソモサの比類ない暴虐支配の下におかれていた。

一八二〇年代、スペインからの独立をかちとったニカラグアに、米帝はニカラグアの政治的混乱に割りこみ、海兵隊による武力進駐で制圧した。そして、サンディノ

らの反米武装闘争に直面した米帝は、チャモロ・サカサとかいらいによる間接支配を試み、「国家警備隊(GN)」を創設した。このGNの初代長官がソモサであり、彼は一九三六年、サカサ大統領を軍事クーデターで打倒し、ニカラグアの独裁支配を実現するのである。以降四十三年間、ソモサ支配は父・長男・次男の三代、四十三年間にわたって米帝の手厚い庇護の下にその忠実にしてどう猛な番犬として人民に君臨し続けてきたのである。

それは、第一にサンディノ暗殺に始まる人民へのテロと蛮行の恐怖支配であり、第二に米資本と結びつき、人民の血液までも売り渡す、空気がソモサのものとなり、言わしめたニカラグア経済と国土の全一的支配であり、第三には、中米防衛理事会(CONDECA)の盟主として、またグアテマラの

「白い手」、エルサルバドルの「白い戦争同盟」、各国の「トリプルA(アメリカ反共同盟)」といった各種の武装反共組織の元締めとして、そして、朝鮮戦争・キューバ反政戦・ドミニカ内戦・チリ軍事クーデター・ベトナム戦争と米帝のすべての反革命戦争の尖兵として存在し続けてきたのである。

九七五年、世界反共連盟総会がニカラグアの首都マナグアで開催されたこと、そしてソモサ軍には七五〇〇の亡命キューバ人部隊、二〇〇の伯南ベトナム政府軍将校、韓国、台湾軍将校七〇名が参加していることは、ソモサの国際反革命としての兇悪な性格を雄弁に物語っている。

また、ニカラグアの大通り、町、河川、湾の主要なものにはすべて「ソモサ」の名がつけられており、麻薬・売春の公然たる企業化や、血液銀行まで経営して売血によって膨大な利益を掌握し、七二年マナグア大地震の際の各国からの救援物資までも横領していたのである。その兇悪な反人民性はブルジョア共の腐敗の権化ともいうべきものであった。

これは、一人ソモサの蛮行にとどまらない。この暴虐支配をつくり出し、半世紀にわたって支えてきたのが米帝であり、また、ニカラグアをはじめとした中米に近年アメリカに次ぐ資本進出をなしているのが日帝であることをはっきり

とつかみとらなければならない。広範な人民の支援によって勝利した武装解放闘争

ニカラグア人民のたたきこいは、五〇年代後半の反ソモサ学生運動や、六一年FSLN結成による武装闘争の展開によってねばり強く続けられてきた。

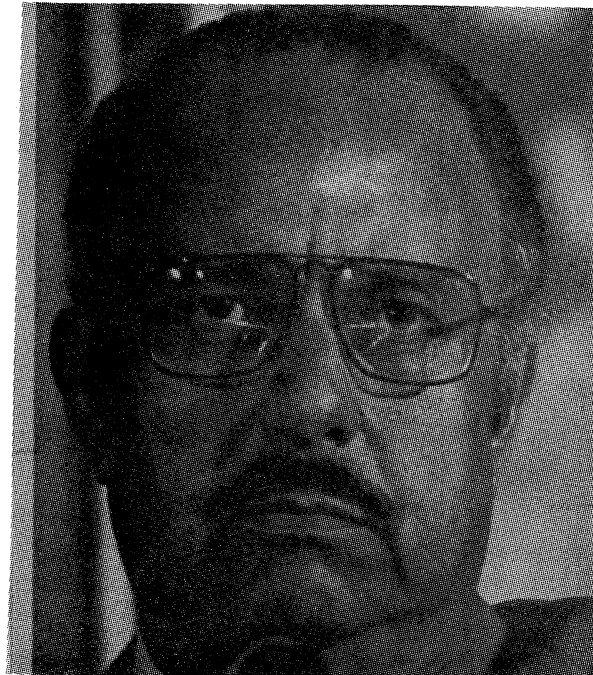
七七年の十月攻勢は首都マナグアにまで攻め入ったが、米カーターの意をうけたイスラエル、アルゼンチンの武器援助、CONDECAの支援によってソモサは窮地を脱した。しかし、その後のソモサの報復弾圧は、七八年一月反ソモサ・ブルジョアジエの組織「民主解放同盟(UDEL)」の創設者であり、ニカラグア最大の新聞「ラ・プレッサ」の主幹であったペドロ・チャモロの暗殺に発展し、これが逆に全人民的な反ソモサ闘争の反撃をつくり出すこととなっ

た。全土にゼネストがまきおこり、FSLN軍が三都市を占拠する中で、反ソモサ・ブルジョアジエをも巻き込んだ広範な人民決起が繰り返され、七八年八月セロ司令官にひきいられた二十五名のFSLN軍の国会官殿占拠闘争、九月の全土一斉蜂起へと発展したのだ。この全土蜂起は、「ソモサなきソモサ体制」をめざし、米帝と米州機構(OAS)の支持のもとにポスト・ソモサをもくろむ反ソモサ・ブルジョアジエ、そして中間で動揺する社会党(PSN)、内部に三分派の対立をかかえたFSLNと、反政府勢力の統一性を欠いたバラバラのたたきこいという弱さをもっていたため、ソモサの延命を一時的に許してしまうこととなった。

しかし、九月攻勢によって、人民の力によるソモサ打倒の現実性をつかみとり、更にはこの攻勢の中で危機にたつたソモサ軍が、FSLNの占領した都市への無差別爆撃をなし、学校を焼きはらい、多くの市民・婦女子を殺害したことに對する激しい怒りがFSLNへの人民の支持を高めた。またFSLNもこうしたたたきこいの高揚の中で、三派の一定の団結をもちとり、七八年暮に三派連名による「兄弟的ニカラグア人民」という声明を發して、ソモサの革命的打倒を訴え、共同闘争を開始したのである。

こうして本年初頭からのFSLNの再度の決起、とくに五月からの大攻勢はソモサを最終的に追いつめた。七月一七日、ソモサは大統領辞任を表明するや、巨額の私財と国銀からも金をもち出し、マリアミへと逃亡したのである。そしてソモサをひきついだウルケヨ暫定大統領もまた、就任の三十数時間後に国外に脱出した。

こうして、FSLNを中心とした人民武装勢力は、四十三年間にわたる「ソモサ王朝」を打倒した。これは明らかに人民の勝利であり、革命戦争の正義の大道が導いた必然的帰結である。



追放された「中米の反革命の頭目」アナスタシア・ソモサ



# 米帝介入の失敗と中南米 支配の破産の始まり

### 米帝の「ソモサなきソモサ体制」工作の破産

ニカラグア内戦に際して、米帝のとった方策は、ベトナムで、イランでとったものと同じであり、その結末もまた同じであった。

七七年一〇月攻勢に揺れ動いたソモサ体制をみて、米帝カーターはポスト・ソモサの工作を始めた。すでに七五年に反政府勢力の最も穏健な「民主解放同盟(UNDEL)」との接触をもっていた米帝は、七八年六月、OAS諸国と共にニカラグアの反ソモサ・ブルジョアジー勢力「UNDEL・MDN(ニカラグア民主運動)」を中心に「反政府広い戦線(FAO)」の結成に手を貸した。米帝のもくろみは、余りにも悪評をかったソモサから穏健なブルジョア政権への交代であり、これによってFSLNの武闘路線を孤立に追い込み、ニカラグア支配の安定的維持をはかろうとしたのである。もちろん、政権交代がスムーズに実現されるまで、ソモサ体制への隠然とした支援も続けられた。

そして同年暮、米州機構(OAS)による内戦終結のための「国際管理下でのソモサ政権の是非を問う国民投票」の提案がなされた。内戦終結―選挙による平和的交代をめざしたので。

この提案はFSLNが拒否、FAOは二つに分かれ、UNDEL以外は反対した。またソモサも自分の権力に固執してこれを拒否しOASの調停は失敗した。こうした結果は、七八年の九月攻勢の成果によるところが大きい。FSLNがFAO結成に際し、これに参加するという柔軟な方向をとり、七八年の軍事攻勢の戦果をもってFAOでの支持を獲得し、米帝と結びついた反ソモサ・ブルジョアジーの「ソモサ追放・民主的自由の回復」というブルジョア的枠組にたたかいを押しとどめようとする「ソモサなきソモサ体制」の策謀を政治的にもうち破ろうとしたことが、その勝利の大きな要因となっていることもはっきりと見ておかなければならない。FAOは結局OAS調停が破産した時点でその命脈が断たれるが、FSLNの柔軟な対処は、以後、「新政権」構想からFSLNを排除しようとする死に画策する米帝のもくろみに対し、FSLNの政権参加は不可欠という認識を広範につくり出すこととなったのである。

こうして、OAS調停案のもと



ニカラグア新政府首脳 左からロペロ、ハッサン、オルテガ、チャモロ、ラミレスの各氏

に反ソモサ・ブルジョアジーの結束をはかろうとした米帝のもくろみはうち砕かれた。米帝は、最後の五月攻勢が始まり、六月一八日には国家再建会議が事実上の臨時政府の樹立として宣言された時点においてもなお、この再建会議にFSLNを参加させまいとし、それが絶望的となると、今度はこの会議の五人の首脳構成比(FSLN系三名、FAO系二名)の逆転を画策したがこれも破産した。さらに米帝はなおも、六月二三日、OAS緊急会議でソモサ辞任要求の決議と共に「OAS平和維持軍」のニカラグア派兵を提案したが、OAS諸国の猛反対にあつてこれも破産した。

米帝の残された道は、現在の国家再建政府の中に存在する親米派ブルジョアジーのわずかな未来に依拠して、新政府へ承認を与える以外ではなかったのである。

イランにひきつづき、ニカラグアでも露呈した米帝のろうばいぶりは、全世界の人民にとって、革命戦争の大道こそが唯一人民に勝利をもたらすものであるという確信を、あらためて鮮明にうちたてたのである。

## 中南米解放の新しい高揚がひらかれた

ニカラグア革命の勝利は、中米五カ国(グアテマラ・ホンジュラス・エルサルバドル・コスタリカ・パナマ)そしてラテン・アメリカ全体に大きな衝撃を与えた。キューバ革命から二〇年、再び大きな革命の高揚が中南米を覆いはじめているのだ。

とりわけ中南米は、単に地理的条件にとどまらない密接な関連をニカラグアとの間に有している。

## ニカラグア革命の新たな 試練とわれわれの任務

ソモサ打倒に勝利したニカラグア革命は、いま、新たな試練に直面している。

その第一のものは、内戦の激闘によって破壊された国土と国民生活の再建である。ソモサの無差別爆撃によって家を失ったもの五〇万、死者は一万五千といわれる。この焼土から新たな希望に満ちた国家再建をたたくことが急務の課題となっているのだ。

第二には、打倒されたとはいえ、ソモサとその一族はアメリカで生きのびており、エルサルバドルやホンジュラスなど、ソモサの息のかかった反革命軍事政権がニカラグアを取りまいており、かつてキューバの反革命侵攻作戦やチリ・アジエンデ政権の転覆に手を貸した彼らが、そしてこれらの反革命

強盗共の後見人である米帝が、新生ニカラグアに対し、政治・経済・軍事のあらゆる側面から圧迫を加え、人民政府の破壊を試みることは必定であり、かかる反革命攻撃との対決もまた重大な課題となっている。

そして何よりも、七月二十日樹立された国家再建政府が連合政権でしかなく、いまだ流動的な政権であり、ニカラグア革命のかかえている困難さを克服する政治的統一性をうちたてるための障害が大きく存在していることが第三の問題である。

国家再建政府は、五人のメンバーによる集団指導体制をとっている。その構成は、主班のセルヒオ・ラミレスが反ソモサ知識人の組織「十二人委員会」の代表、モイ

セス・ハッサンが「統一人民運動(MPU)」の指導者、ダニエル・オルテガがFSLNの司令官、アルフォンソ・ロペロがFAOに属し、チャモロ夫人がFAO内のUDELに属している。大きく分けて、前三者がFSLN系、後二者がFAO系と言える。

この政府をラミレスは「政治的にも社会的にもニカラグアのあらゆる階級を代表している」と述べているように、それは、ブルジョアジー・小ブル・プロレタリア、貧農をも含む政権であり、めざす路線もまた大きく違っている。FAOの綱領は、ソモサの追放、人権と民主的権利の回復にとどまるが、FSLNが都市部での大衆組織として、社会党(PSN)や十二人委員会と連携して結成したMPUの綱領は、銀行や基幹産業、石油や資源の国有化、大土地所有の廃止、農業の近代化共同化、人民軍の創設まで求めているのである。

こうした政府内の階級的対立に加えて、FSLNの内部にも路線上の対立をかかえている。FSLNには当初から都市労働者の組織化を重視し社会党との連携をはかっていた「プロレタリア派」と、農村を中心とした人民戦争を主張し、プロレタリア派の方向を「社会的傾向」として退け、キューバ

革命にも批判的な「継続人民戦争派」との間の対立があり、他方この内部論争を「個人攻撃、セクト主義」として批判し、論争ではなく現実の行動で回答するといふ「ゲバリスト」とも呼ばれる「第三者派」(テルセリスタ)が存在する。このテルセリスタがFSLNの圧倒的主流派であり、七七年からの主要な軍事攻勢、とりわけ七七年一〇月攻勢、七八年国会占拠闘争、そして九月攻勢を単独で敢行してきたのである。

こうして、ニカラグアの解放勢力は、階級的対立、政治路線の対立をかかえたまま、昨年九月からの攻勢の局面の渦中で、ソモサ打倒での一定の結束をかちとってきたのである。

したがって、こうした解放勢力内の対立が、今後ニカラグア再建が戦後処理からより具体的に、軍の再建、経済の再建に踏み出す過程において、現実的な対立として表面化するとは避けて通ることのできない課題である。

テルセリスタのダニエル・オルテガは「反ソモサ・ブルジョアジイとの協調は、戦術的、一時的なものである」と述べ、「過去の歴史で『人民戦線』がその結果をつねにブルジョアジーに奪奪されてきたことを忘れてはいない」とブル

ジョアジーに対する警戒と米帝とソモサの残党に対する警戒を正しく指摘している。

ニカラグア革命のプロレタリア革命への発展は、まず何よりもこのFSLNが、広範な人民結集をいかにつくり出し、革命への「ゲモノー」を握ることができるとにかかっている。

しかし問題はそれだけにほとどもまらない。われわれをも含めた世界の革命的なたたかひの内実と成否もまた大きく問われているのである。

すなわち、ニカラグア人民の直面している試練は、単にニカラグア人民のたたかひによってのみ克服しうるものではなく、中南米人民の解放闘争、そして反革命まき返しをねらう米帝や日帝のもとにある帝国主義本国のプロレタリア人民のたたかひ、また労働者国家の人民のたたかひが、共に危機に立つ帝国主義の延命を打ち破る最前線にたたかっている第三世界人民の勝利と解放をめざした決起によってはじめて克服することができるのである。

とりわけ、これまでの第三世界人民の解放闘争の進撃に対して、常に大国主義的・一國主義的な利害のみを求めてきたソ連や中国が、自国の防衛や経済建設のためにニ

カラグアや中南米解放の高揚を反動的に収束させ、その革命的発展を阻害しようとするものであることを確認しておかなければならない。

まさにニカラグア革命は、帝国主義の反革命的まき返しと、中・ソ両大国の一國主義的介入の二つの重圧のもとにおかれているのだしたがってこの重圧を共にうけとめ、困難な状況をのりこえて、真に被抑圧民族人民の解放をかちとるべく決起することが革命的共産主義者たらんとするものにとつて問われているのである。

われわれは、ニカラグア人民がきりひらいた革命戦争の大道をしっかりとひきつぎ、被抑圧民族人民の利害を守りぬきその勝利に貢献すべく、日米両帝国主義の反革命的まき返しとの対決を一層強めていくのでなければならぬ。

八〇年代はまさしくニカラグア人民をはじめとした第三世界人民の勝利の前進が一層明白なものとしてうたてられる時代であり、この勝利に貢献すべくたたかひぬくことをわれわれの階級的責務としてはつきりとつかみとり、勇躍決起しようではないか。

# 第四回全障連大会開催さる

## 働く「障害者」の団結かちとる!

8.11-12

八月十一・十二日、明和泉校舎において第四回全障連大会は開催された。

全国からこの一年間闘い抜いた「障害者」、共に闘う支援二千名が結集した。

金井さん、赤堀さん、小笠原さんがアピール

部落解放同盟、三里塚反対同盟の連帯のアピール、就学闘争にて逮捕者を出しながらもなおたたかいの前進をかちとらんとする金井君のお母さんからのアピール。そして死刑攻撃の苦悩の中におも「ミナサンダンケツシテクダサイ、ガンバツテクダサイ」と獄中からわれわれを励ます赤堀さんのアピール。放火犯にデッチあげられながらもそれと断固たたかうとの「ろう者」の小笠原さんのアピールが続く。

基調報告は『障害者』をとりま

く情勢は更にきびしくなった。福祉切りすて、養護学校義務化強行、ボランティアを使った攻撃等と、右傾化し「障害者」からますます離れた既成労働運動ではなく三里塚反対同盟、部落解放同盟、たたかう労働者との結合を強めていこう」と提起された。

労働の現場から差別を告発

午後、六つの分科会に分かれ、たたかひの報告と方向をめぐり討論が開始されていった。

労働分科会においては、就労闘争をたたかう「障害者」からの報告や「視覚障害者」からの労働実態の報告、大久保製パンから「今まで社長が来ればなぐられ皆ビクついてた。でも今は逆に社長が来ればわれわれは詰めより社長がコンコンと逃げていく。他の仲間にも同じようなことをわれわれが勝利したように作っていきたいんだ」と発言された。葛飾福祉工場から

「福祉関係者達がわれわれを月三

万というひどい条件で働かせている。われわれは今たたかっている。働く「障害者」はもつと横のつながりをもとう」と発言、そして働く「ろう者」から「夜中までの仕事と低賃金、いやになっても反抗すると浮浪者になっていく。そんなろうの仲間がいっぱいいる。今同じ苦しみをもつ小笠原さんと共にたたかおうとしている」と報告されていった。

「ろう者」交流会で小笠原裁判闘争訴える

夜に入って障害別の交流会もたれた。「ろう者」の交流会では、デッチあげられた厚見中学校放火事件の8ミリ映画が上映され、小笠原さんの手話により、貧しいために聞こえなくなり苦しい生活のために盗みをおこない放火をデッチあげられたことが話された。

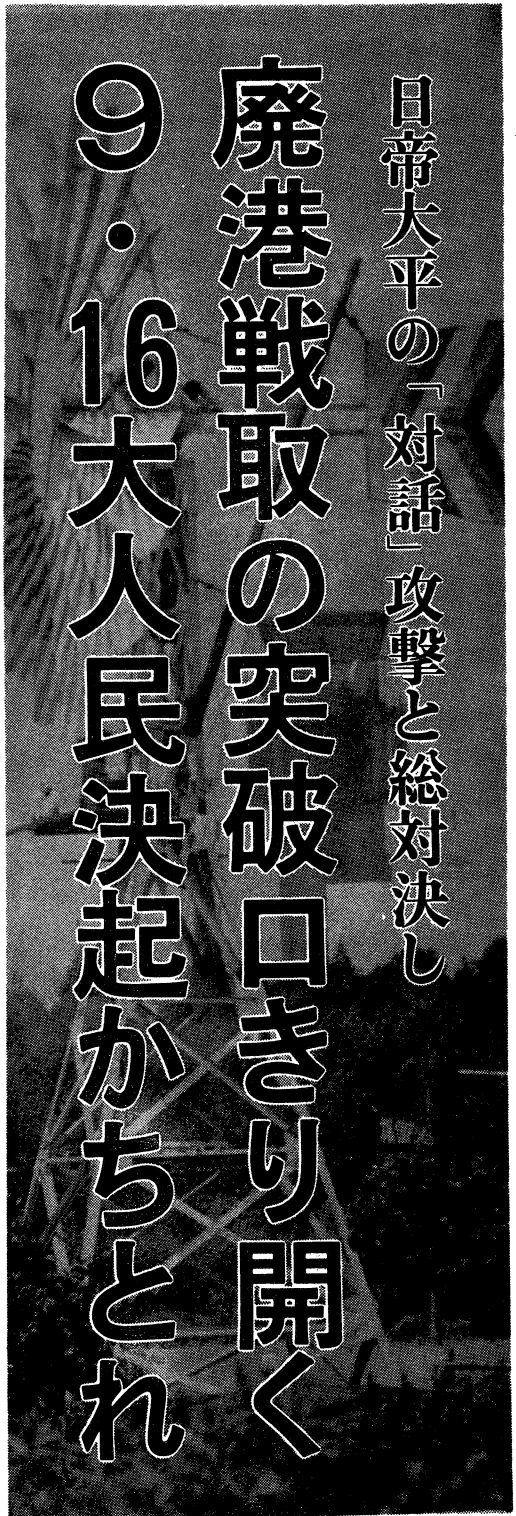
一二日、再度の労働分科会では、前日の討議をふまえ全員的一致で労働小委員会を発足し、団結して

共にたたかひることが確認されていた。

最後に総括集會が開かれ、大会宣言が採択されていった。

八〇年へ向け、日帝の人民への総攻撃は「障害者」により過酷にのしかかっている。

だが今大会に見られるごとく、「障害者」は自分の生活の根柢から決起をなし、反撃を作りだしている。昨年を上回る結果と、各地でのたたかひの前進、就学闘争、地域での自立のたたかひ、働く「障害者」の決起にそのことは示されている。われわれは、そうした「障害者」と喜びも悲しみも共有できるような日常のたたかひと結合をつくり出してこそ、われわれの飛躍も解放闘争の発展もかちとることができるといふことをはっきりと確認しなければならぬ。日帝の八〇年へ向けた人民分断支配、「障害者」差別抑圧と対決し「障害者」解放をかちとろう!



全国の同志・友人諸君！  
三里塚闘争は、本年十二月、事業認定期限切れをめくり、政府・公団との熾烈な攻め合いの秋をむかえている。

そして、二期工事阻止・空港廃港への巨大な突破口を切り拓くべき九・一六大闘争は、目前に迫っている。

われわれは、九・一六闘争への大人民決起をたたかいつつに、本年七月一六日、森山運輸相声明に端を発した、第二の「対話」攻勢のベテランと欺瞞性を徹底あばき出してゆくのでなければならぬ。

三・三〇開港を粉々に打ち砕かれ、人民の力の前に骨の髄まで震え上がった政府・公団は、欺瞞的「対話」をもちだし、あるいは農民の切実な要求を逆手にとり、農民を日帝農業政策―農民支配の下に組み敷かんとする「農振計画」「成田用水事業」をもって三里塚農民におそいかかり、本年三月七日、「二期工年内着工」宣言に打って出た。

しかしながら、この「農振計画」「成田用水」の欺瞞性を見ぬき、日帝農業政策にたよらず、自らの力で活路を切り開かんとする三

## 「対話」攻撃の欺瞞的本質を徹底あばき出し、二期工事阻止―廃港への決戦段階を闘いぬけ！

二期工年内着工の破産的事態

七月十六日森山運輸相は、記者会見をおこない、三里塚農民に話し合いを呼びかける声明をなした。

「話し合い」のテーブルにつく条件は、その後の経緯からおおむね「二期工事の一時凍結」ということである。

「二期工事の一時凍結」とは、本年三月、森山の「二期工年内着工」宣言の破産を意味しているものであり、政府は、今年十二月二十五日事業認定期限切れを前にした二期工年内着工への展望を、現段階において全く喪失してしまっていると言わざるをえない。

政府の二期工年内着工の目論見を打ち砕いているのは、第一に、もちろんこれが主要因なのであるが、いままでもなく用地内農民を先頭とした三里塚反対同盟の健在にある。

「対話」攻勢の中で、ブルジョアマスコミを動員した「用地内二戸脱落」の大宣伝・暴露にもかわらず、未だ用地内農家十五戸が頑強に闘いぬいているというのが今日の現実

三里塚農民は、木の根用水事業をおこし、反対同盟の団結を新たに打ち固めんとしてきた。この反対同盟のあふれんばかりの生命力の前にあせりを深めた権力の攻撃が、第二の「対話」攻勢である。

反対同盟の組織破壊・労働人民との分断を策動し、三里塚闘争を根底から解体させんとする新たな「対話」攻勢との真っ向からの対決をさせて二期工事阻止・廃港闘争へ進撃することはできない。

十三年にわたる国家権力との頑強な闘いの中でつちかかってきた三里塚農民魂は、何度も難局を克服し、今また「対話」攻勢をはね返し、九・一六大反撃を呼びかけている。この偉大な三里塚農民の姿に、とことん学び、支援・連帯の内実を根底から打ち立てるべく、今秋期三里塚政治決戦へわれわれは、心の底からの沸きあがる決起をかちとってゆくのでなければならぬ。

日帝・大平の「対話」攻勢と総対決し、九・一六へ、今秋期三里塚政治決戦へ、猛然と進撃せよ！

である。

もし、このまま政府が二期工事を強行し、用地の強奪のための強権発動―強制代執行の暴挙にうって出るならば、第一次・第二次代執行闘争時をはるかにうまわる怒りの人民決起をもたらし、第二・第三の三・二六を生み出すであろうことは必至であり、政府はその政治生命を失いかねないのである。

今日、三里塚をとりまく支持・連帯は、かつてなく広く、深く形成されてきている。悪農政に三里塚農民とスクラムを組んで闘う全日農の青年達、三里塚と交流しつつ全国行進をうちぬいてきた部落大衆、三里塚闘争への参加をめぐって中央の組織破壊に抗して独自組合を結成した千葉動労、三里塚に続かんとする全国住民闘争、三里塚裁判闘争にたちあがる被告家族達。この三里塚と結ぶ勢力の力をあなどることはできないのである。

考えても見よ、現行一期分の運航を保持しながら、木の根をはじめとした用地への実力行使には、一期分強行開港前後の一万五千噸戒体制をはるかにうまわる機動隊を動員し、それも更に長期間にわたってはいつつけねばな

らない。よほどの政治的決断が問われることなのである。

政府の年内着工の目論見を阻んでいるのは第二に、五月強行着工したとはいえ、六千五百の沿線住民署名をたたきつけた住民の怒りの前に、開通の見通しがたえないという本格パイプライン施設の現状である。現行暫定貨車輸送では今日、四、五日分の備蓄しか確保できていないことから見ても、二期の運航などおよびもつかないのである。

その第三は、政府部内における開発計画・航空政策の流動的状況である。

日帝国家財政は、国債依存率四〇％と大幅赤字に落ちこんでおり、大平は大衆消費費導入を策動しつつも、当面、開発計画具体化を大幅縮小せざるをえない状況となっている。又、三里塚をはじめとする人民の頑強な闘いの前に、航空行政全体の見直しもはじまっており、国際空港の地方分散化が「六眼レフ構想」としてとりざたされている。

とりわけ、羽田の沖あい移転拡張計画が、鈴木都知事の誕生によって進むべきしをみせ、事態は一層流動化しているのである。(美濃部は沖あい移転・縮小を主張していたが、鈴木は移転に際し、現行滑走路本数プラス二本の滑走路の拡張を認めた)

かかる権力内部の流動化と動揺と分裂こそは、三・二六をはじめとする偉大な人民の闘いが国家権力内部にうちこんだクサビであり、闘いの成果なのである。

このようにして、政府の「二期工年内着工」計画は徹底追いつめられ、破産のうきめにあっているのであるが、この危機のドン底からの凶暴な攻撃として、今日の「対話」攻勢があくまで二期工事の早期着工へ向けて加えられてきているのだということを知らねばならない。

「対話」攻勢の欺瞞性・反人民性

それでは「二期工事の一時凍結」を条件に「話し合い」のテーブルにつくとは、一体如何なることを意味するのか。

それは、第一に、いままでもなく二期の凍結が一次的なものであり、あくまでも二期着工の地下づくり以外ではないということであり、これに合意することは、条件闘争へと三里塚闘争をおとしこめることを意味している。

第二には、それは、現在の一期分暫定開港を既成事実として認め、これの安定維持をはかる結果をもたらす。金と強権による五・二〇開港を認めることによって、これと闘ってきた三里塚十三年の闘いの正義性を根こそぎ

にしてしまふものなのである。

農民に対し、協調的ポーズをとり、「胸きんを開いて話し合いに応じる」よう呼びかけた今回の「対話」の内実が、如何に欺瞞に満ちたものであるか、明白なところであり、正しくも反対同盟は、この欺瞞を見ぬき、徹底した内部討論によって、「対話」拒否を固めたのであった。

それでは、一体、政府の「対話」への真の目論見は何なのか。  
政府は、ブルジョアマスコミを動員して、「対話」キャンペーンをはる中で、「和平グループの存在」「用地内二戸の脱落」をことさら大々的に宣伝してきた。ここにみられるように、政府の「対話」攻勢の真の狙いは、第一に反対同盟組織へのゆさぶりであり、あわよくば、反対同盟を分解・解体せんとする組織破壊である。

その第二は、二期工事の成否が用地内農家の切り崩しの如何に大きくよっていることから、用地買収のテコにせんとするところにある。

政府は、本年二月の森山「二期年内着工」宣言をもって、用地内農民に対し、生活権を根こそぎにする強制収用の、以前にも増す重圧を加えつつも、十分な成果が得られぬと見るや、今度は、反対同盟へのゆさぶりによって、内部不信を醸成し、買収工作を何として進めんとしているのである。

# 木の根用水建設の成果をふまえ、全人民の力で三里塚を守りぬけ!

「対話」攻勢の中、問われているのはわれわれである

「対話」攻勢が吹き荒れる今日、われわれに問われているのは、とことん農民に依拠し、永続的に闘いぬけるような三里塚闘争の団結と発展をいかにして構築していくのかということであり、このためにわれわれがどう貢献し闘いぬけるかということである。

農民との連帯を問う時、われわれは「支援は都合が悪くなれば、三里塚を離れてどこへでもいける。しかしわしらは家と田畑をしょって出るわけにはいかない」という痛苦な農民の言葉を受けとめるところから出発しなければならぬ。

七三年夏から、七六年三月現闘団再建にいたる、わが戦旗派の三里塚現地からの召還という痛苦な歴史的負債を負われれば、ならばこそ、根底的なところにおいて、支援・連帯を問ひ、応え抜いてゆく歴史的責務を負ってきた。

そして現闘団再建以来二年にして、三・三〇開港を粉々に打ち砕いた三・二六空港包囲・突入・占拠闘争の一翼をわれわれは担い抜いた。われわれは、またこの闘いを担い抜いたがゆえに、一層、連帯の質を深く問ひ直す契機を与えられ、以降、二期工事阻止・廃港にむけて農民の実存にせまらざる主体への飛躍をめざし、農民との内在的連帯をかちとる道を追求し、闘争戦術の展開に終始することをしりぞけてきた。

その第三は、三里塚を支援し、連帯せんことをよせる全国の労・農・学・市民の闘争力を解体せんとするところにある。三里塚農民と全国の支援勢力を分断せんとする悪らつな攻撃と言わざるをえない。

このように権力の「対話」攻勢は、空港建設の破産的事態をおおいかくし、三里塚闘争を解体させ、二期早期着工を実現するためのもの以外ではない。

更に重要なことは、権力の二期着工の成否が、この「対話」に大きく負っていること、これを実現し、二期のスムーズな着工を立てきれないならば、羽田拡張や、地方の国際空港化による成田の準国際空港化などの航空政策の矛盾が一層大きくなり、三里塚から権力と空港をたたき出す人民の闘いの勝利が現実のものとしてかちとりうる大きな前進をつくりだすことができる。

そのような意味で、今秋期三里塚闘争は、二期工事阻止・廃港闘争の勝利にとって非常に重大な位置を有しているのである。

敵の攻撃が、反対同盟に集中してかけられている今日、われわれは、何よりも反対同盟農民の闘い団結、三里塚と全国の闘い労・農・学・市民の団結をかちとり、共にこの攻撃を受けとめ、はね返すために立ちあがらなければならぬ。「対話」攻勢を打ち破り、二期工事阻止・廃港への決戦段階を断々固として闘いぬこうではないか。

れにとつて、きわめて重大な意義をもつものであった。

## 革命根拠地打ち固める木の根用水建設

われわれは、ここで木の根用水建設の成果をはつきり確認しておくのでなければならぬ。

その第一は、「農振計画」成田用水攻撃と真っ向から対決するものとして闘いとられたことである。

「農振計画」成田用水は、ただただ力づくで農民をねじふせ、開港にこぎつけんとして、三・二六大敗北をきった政府の、新たな反対同盟解体策という性格をもって打ち出された。

土地基盤整備・水の確保など、農民の切実な要求を逆手にとった「農振計画」成田用水の目論見は、第一に周辺農民の生活基盤を日帝農業行政の下に組み敷くことにより、空港建設に反対する農民から闘争の大義を奪い、体制内化をはからんとするものであり、第二に用地内農民をこの計画から除外することを通じて、用地内外の農民の団結を解体せんとするものであり、第三に農民の階層分解を促進させることを通じて、三里塚反対同盟の解体と「対話」への切り口を開かんとするものである。

反対同盟農民は、空港政策が農業の根本を破壊する非難に政府の農業政策が農業破壊をもたらすこと、日帝・農政の下に従い、その「保護」の中で生き続ける農業が、農業の根

本を破壊する空港政策に対して、いかに対抗力のないものであるかをいうことを長い熾烈な闘いの日々の中からつかみとってきた。

反対同盟農民は、この新たな「農振計画」成田用水の攻撃の中でも、ひしひしと現実をかみしめているのであり、ならばこそ、三里塚農民の闘魂にかけ、この新たな敵の攻撃の目論見を打ち破る「戦う農業」建設と、その第一歩としての木の根用水事業にのりだしたのである。

成果の第二は、二期工事阻止へむけた三里塚農民の団結をつちかい、木の根を更なる「土地要塞」「人間要塞」として打ち固めたことである。

木の根農民は、「暫定開港」既成事実化の重圧、あるいは「日々これ死刑台に登っているようなもの」と言わしめた土地収用法の重圧下におかれているのである。

「小川源・七郎・直克三兄弟ゆかりの地、この木の根の台地こそは、とんび鉄を打ちふるい、マガミなる家を建て、生涯骨を埋むる覚悟で、入植せる所ならん。数多くおりし部落民は今はなく、朝ジェット機の轟音とエンジンテストの響きは、どれ丈人間の心に打撃を与えるものであろうか。農業振興に名を借りて敵の攻撃は著しい。焦りと焦燥は人の心を揺さぶる」(木の根用水起工式 祝詞)というように、木の根農民の苦痛はたとえるものもない。しかしこの中でも木の根農民は、不屈に壮絶なる日々を闘いを貫いている。

「けれども小川源の心は固い。土地に対する愛着と、作物をはぐくむ家族ぐるみの戦いは、遂に灌漑事業に発展せり。又、反面、二期工区実力阻止の要として大きな役割を果たすであろう。毅然たる戦う姿勢、これこそ農民魂、反対同盟の姿でなくてはならぬであろう。今此所に新たな闘魂はみなぎる」(同前)というように、まさしく木の根農民は、二期工区用地の中心で、そして空港の眼前で、二期工事を阻む「土地要塞、人間要塞」を木の根用水の建設を通して打ち固めた。

そして、反対同盟農民は、この祝詞にもみられるように、木の根農民の苦悩をわがものとして感受し、炎天下、五〇日にわたる突貫工事を、農繁期にもかかわらず、かつてない動員を維持し、「自分の百姓仕事でもこんな一生懸命働かねえぞ」というように建設を担った。こうして二期工事阻止へ反対同盟の団結はつちかわれていったのである。

## 日本農民運動の道を指し示す「戦う農業」の内実

成果の第三は、この闘いを通して革命的農民運動の内実を端的にはあれつくりだしていることである。

木の根用水の建設にあたり、反対同盟の石井新三氏は、次のように語っている。  
「三・二六があったって、政府は、十名の農学者に研究させて、三里塚農業の切実な要求と対処をまとめさせた。農振策は百姓の要求をのみこみ、百姓の農業を支配して、百姓から空港反対の大義を奪うもんだ。大義を奪われて空港反対もなかつた。それからの反対運動は「土地を売らねえ」だけではたちまちできぬ。おれたちはどこで人民のために農業をやったから、空港はじゃまだ言うんじやなきゃ」

この石井さんの言葉は、「ふゆかか火の

粉をふりはらう」という闘いとどまらず、農民自らが革命的農業をつくりだし、人民の権力を打ち立てることをめざす意味をもって闘っているのである。

木の根用水は、横風用滑走路予定地の中心部で闘い続ける木の根地区小川三兄弟、そして同地区にある瓜生・菅沢さんの畑をうるおすものとして反対同盟を先頭に人民の力で建設されていった。「更にゆたかな、長期のほげしい戦いに充分耐えうるよう農業基盤を一層充実させ」（反対同盟カンパ要請文）ることを直接的要請として、日帝農政Ⅱ農業破壊のため、国や自治体から与えられその管理の下におかれる成田用水を批判し、水を戦う総意によって確保・共有し、管理することをおしすすめたのである。われわれは、この事実から木の根用水建設の革命的現実をつかみとるのでなければならぬ。水は農民にとってきわめて切実なものであり、昔から水をめぐる農民の争いは絶えない。

そして今日では、国・自治体が水を支配し農民の隷属を強いる武器ともしている。こうした中で三里塚農民は、木の根用水建設を通し、人民の力で、自らの手に水を奪還し、共有・管理しようというのである。

これは端的とはいえず、人民の権力を打ちたてんとする思想的現実を有する試みと言わざるをえない。まさに三里塚は、「小土地所有者、小生産者として存在する農民主体が、その小ブル存在としての階級的限界性を取りこえ、革命的プロレタリアートとの団結の下で、農業問題の基本的解決形態としてある農業集団化や農民の革命的結束へ向かって「戦旗四〇一号」ゆく農民の自己変革の闘いを内包して闘われてきている。

その意味で三里塚は、これまでの日本農民運動の地平をこえて、真に日本革命を展望する拠点たりえているのである。従って第四に、この闘いが日帝農政下で苦闘する全国農民に、日本農民の進むべき道を照らしだしていることである。

「農振計画」・成田用水は、「地域農業振興策」と銘打って打ち出された日帝農政Ⅱ農業破壊の最頂点をなすものとして、九三・九〇から九六〇という全国でも最高の補助率をもって推進されている。

まさに木の根用水建設の闘いは、日帝農政との最頂点をなす闘いとして、全国農民闘争の最先端における闘いという現実を有し、全国の農民を限りなく激励しているのである。三里塚農民は、古くは忍草・日本原・八郎瀧農民と連帯をあたため、最近に至っては、更に七・一一一三米佃闘争を闘う全国農民と合流し、全日農青年部とともに農水省突入一座り込みを貫徹し、八月全国農村活動家交流会の三里塚現地開催で全国の仲間と交流を深めてきた。

こうして三里塚農民は、農民にとって三里塚とは何か、を広く日本農民に問い、広汎な農民との連帯を創出しつつあるのだ。

以上四点にわたって木の根用水建設の意義を確認してきたが、われわれにとって木の根用水建設とは、いかなるものなのか。

それはまさに農民の闘争・生産Ⅱ生活の全面にわたって連帯の内実を構築し、まさに全人民の闘う財産として、二期工事阻止の拠点を木の根の大地にうちたてたということである。それは、権力による三里塚問題の解決策で

ある「農振計画」―「対話」という農業破壊や反対同盟解体、農民と全国人民との団結の解体と鋭く対決するものであり、三里塚農民と人民が進むべき道と連帯の内実を一層打ち固めるものなのだ。

その意味において、今日、敵の「対話」攻勢に対して、木の根用水建設がつかかってきた闘う内実を継承し発展させていくという

### 三里塚農民と全国人民の闘う団結かけ、九・一六現地総決起をかちとれ!

三里塚闘争は、今日、きわめて重大な局面を迎えている。

敵の「対話」攻勢と反対同盟のこれに対する拒否宣言は、二期工事か廃港をめぐる熾烈なせめぎあいの攻防に突入しているということを示しているのである。

政府は、「対話」へむけた一年間の「二期一時凍結」を示しつつ、反対同盟農民の切り崩しへ向け、かつてない、全体重を傾けた攻撃に打って出んとしている。

運輸省は、八月二十五日、第四次空港整備六カ年計画（八〇―八五年）の概要を公表し、二期工事へ六年間で五千五百億円という巨額の金をつぎこむ意向を示した。まさにこれこそ、反対同盟農民に対する新たな挑戦状と言わねばならない。

政府・公団は、この新たな挑戦状をもって今秋期、三里塚農民に襲いかかるとしているのだ。

「暫定」とはいえ、四千メートル滑走路をもって運航を行っているという開港の既成事実、そしてますます騒音地獄の現出による重圧と札束をもつての用地内農民・岩山地区農民に対する買収工作、「周辺農振計画」・成田用水・農協移転の具体化を通じた周辺農民の体制内化と用地内外の分断、そして反対同盟の分断・解体をはかる「対話」攻勢、これらすべての集中攻撃を三里塚に加えんとしているのである。

政府・公団は、総がかりの攻撃で満足のゆく結果をうるとすれば、一年といわず、今日明日にも二期工事に手をかけてくるに違いない。かかる意味において、今日、三里塚は決戦段階を迎えているのであり、われわれは、この決戦段階を二期工事阻止―廃港へ向け、総力をあげた闘いにたちあがるのでなければならぬ。

三・三〇開港を打ち砕いた人民の力は、今も人民の実力として敵権力をおびやかしている。だからこそ政府は、二期の強行着工へ二の足を踏んでいるのである。

「対話」の一大キャンペーンをもって、三里塚と全国人民を分断せんとする策動、人民の力をそぎ落そうとする目論見を許さず、反対同盟の呼びかけにこたえ、九・一六三里塚へ総力の決起をかちとり、人民の力を示すこと、このことが全国の人民にとって決定的に問われている。

従って、二期着工をくろむ「対話」攻勢と対決し、廃港実現に向けた決戦段階を闘い抜くのだということ、これが九・一六決起へ向けてわれわれが確認すべき第一である。

その第二は、木の根用水建設の成果をふまえ、革命の拠点三里塚を全人民の力で守り抜

方向でこれを打ち破ってゆくのでなければならぬ。

われわれは木の根用水建設の歴史的階級的意義をしっかりと打ち固め、あくまで三里塚農民に依拠し、内在的な連帯をうちたて、「対話」攻勢―二期早期着工と対決し、廃港闘争の勝利の展望を更に巨大にこじあけていくのではないか。

くべく闘うということだ。

三・二六を生み出した人民の力は、三里塚闘争の大義と結びついて爆発的に発揮されてきた。だからこそ敵権力は、今日、反対同盟農民にその攻撃の全てを集中しているのだ。しかし、反対同盟農民は、敵の集中攻撃を一身にあびながらも、渾身の力をふりしぼってこれと対決している。

われわれは、集中攻撃を加えられている三里塚農民を孤立させるのであっては決してならない。

今こそ、敵の攻撃を反対同盟と共に受けとめ、心を一つにしてはね返す、そうした連帯の内実と実践をつくり出してゆくことが問われているのだ。

木の根用水建設は全人民の力を寄せ集め、敵の「農振計画」成田用水攻撃と対決し、闘争と生産Ⅱ生活を貫く連帯の内実を構築するものとして、全人民の財産として、木の根の地に二期工事を阻む岩をうちたてた。

この成果をひきつぎ、あくまで三里塚農民に依拠し、永続的に闘い続ける内在的連帯をうちたて、革命の拠点三里塚を更に打ち固めるならば、敵のスムーズな二期工事着工は、一年といわず永遠に不可能となろうし、空港建設の矛盾は一層激化し、三里塚から空港を追い出す勝利の展望は、大きく開かれるのだ。

#### 管制塔戦士の年内奪還を!

九・一六へ決起するにあたって確認すべき第三は、管制塔戦士年内奪還へ向けた闘いの突破口としてゆくことである。

管制塔裁判闘争は、今日、航空危険罪をめぐる重要な段階をむかえている。われわれは七―八月の攻防を通して、事後逮捕の佐藤・和多田両君の併合をかちとり、九月三回指定公判を打ち破ってきた。

しかしいまだ十月以降の月三回指定は撤回されていない。われわれは、何としても航空危険罪を打ち破るためにも、十月全日指定を粉碎するのだからなければならない。

それと共に、戦士の奪還も重要な課題となつていく。

管制塔戦士と三月要塞の一部の被告を除く開港阻止決戦被告全員の奪還がかちとられ、早や半年の月日が過ぎた。

それに事後逮捕の同志の併合によって保釈を拒否してきた権力の「罪証いん滅」なる口実もいよいよその空虚さを露呈させ、報復的拘留であることをきわだたせている。

更に、航空危険罪をめぐる重要段階にある今日、これをはね返すような公判準備をなす上でも保釈をかちとることは決定的に重要で

ある。  
全党をあげて闘いとる管制塔被告年内奪還  
へ向け、九・一六への闘いをその突破口とし  
ようではないか。

署名・保釈金の結集、抗議ハガキ、集会、  
裁判傍聴への動員などあらゆる手段を駆使し、  
創意を結集して戦士奪還を闘いとう。

そしてこの中で結集した力を三里塚決戦へ  
還流し、三里塚勢力のすそ野を一層拡大させ  
るのだ。

管制塔戦士水野君のお父さんは、「話し  
合い」とかいつて反対同盟も今がいちばん大  
変なときだ。私もできることがあったらやり

たい」と言われ、反対同盟救済副部長堀越さ  
んと共に、七六歳という高齢をおして、東北  
・山陰・名古屋など全国に散在する被告家族  
をたすね歩いている。こうした人民大衆の創  
意と実践こそが、三里塚をささえているのだ。  
人民の創意に徹底して依拠し、三・二六精神  
で武装して戦士年内奪還へ進撃しようではな  
いか。

全国の同志・友人諸君！

日帝・大平は、しのびよる朝鮮危機・体制  
的危機に対し、今日、戦争への国民総動員を  
はかるべく、エネルギー危機とか不況という

事態を逆用し、階級協調をよそおいながら、  
中道・既成左翼の右傾化や労働運動の抱き込  
みをなしてきた。三里塚に対しても、三・二  
六によって大敗北をきつした福田にかわって、  
「対話」など階級協調をよそおいながら、反  
対同盟の解体・三里塚闘争の破壊・二期工事  
着工・三里塚の侵略反革命拠点化をたくらん  
でいるのである。

決戦段階をむかえた三里塚闘争の必勝を期  
し、九・一六現地へ総力決起せよ！  
秋期政治決戦を闘い抜き、八〇年代闘争陣  
形を構築せよ！



# 来たれ三里塚へ！

## 水野君御両親三里塚現地へ

「お父ちゃんの子供が遠足に  
行く時みたいにならわさわして  
たんですよ。」去る8月2日管  
制塔戦士水野隆将君の御両親と  
北爪安子さん（勝利させる会世  
話人）、中川君の姉さん一行が三  
里塚にやってきた。

堀越昭平さんの案内で現地を  
見学する。3・26主戦場であっ  
た9ゲート、8ゲートを回り管  
制塔の真下を通る。「あなたの  
息子達はどこで闘ったんだ。」  
堀越さん「マンホールの入口が  
見えてくる。「こんな所から管  
制塔にかけ登ったんですね。本  
当によくやったといつてやりた  
い。」（水野・母）秋葉哲さんと  
合流し木の根用水建設現場にた  
ち寄る。「闘う人々の力はすば  
らしいですね。風車を見上げな  
がら秋葉さん、堀越さんの説明  
にお父さんは力強くうなずく。  
朝倉部落の秋葉さん宅ではジ  
ェット機の大騒音さえもつまみ

として闘いの話に花が咲く。と  
りわけ保釈運動に向けた話に入  
ると「保釈に向けて、花尻につ  
けこまれないよう、心を一つに  
なり、しっかりとすることが重要  
だ。」（水野・父）と熱が入る。

8月9日より水野（父）さんと堀  
越さんとで全国に散らばる家族  
との交流「行脚」に出発するのだ。  
最後に北原事務局長宅を訪問  
する。「9・16闘争をもって政  
府の対話路線に対し闘う姿勢を  
示しぬきます！」できたばかり  
の9・16招請文を読みあげ北原  
さんは語った。「がんばりまし  
よう！」共にたたかいを確認す  
る。

「現地にきて本当によかった。  
三里塚のたたかいは正当性がは  
っきりわかりましたよ。」三里塚  
現地のたたかいはと空気をすいこ  
み、御両親のゆるぎない確信を  
もったたたかいは獄中戦士達と  
共に必ず反動花尻を追いつめる  
だろう。

## 全国農村活動家交流会開か

8月5・6日労働合宿所にお  
いて全国農村活動家交流会がひ  
らかれた。この間東北の農村青  
年を中心に農業破壊の自民党農  
政に抗したたかぬいてきた各  
地の農民が結集しちちとられて  
きたものである。今回は八〇年  
代のたたかいかみとるべく  
最先端のたたかいかみである三里塚  
闘争に学ばんと、百余名の仲間  
が結集した。

## 第一日目―現地調査ののち、

全体集会がもたれる。「政府の  
農振計画が打ち出されて以降、  
本場の意味で農民としてのたた  
かいが三里塚で問われはじめた。  
これとどうたたかうかというこ  
との第一歩として木の根用水、  
たたかう農業がある。」（石井恒  
司さん）等反対同盟からあいさ  
つが行われた。続いて各地の報  
告がなされる。千葉から農振計  
画について加瀬勉氏より提起が  
なされ、岩手から花巻空港拡張  
反対闘争の経験、山形から第二  
次減反に抗す「百姓塾」の報告が  
なされた。また、その夜反対同  
盟との盛大な交流会がもたれた。  
第二日目―四つの会場に分か  
れ反対同盟、青行隊まじえ分散  
会がもたれた。合宿所第二分散  
会場では小泉英政さんが「大木  
よねばあちゃんのたたかいかみ」を  
語り、八〇年代の農民運動の依  
拠すべき階層の問題が討論され  
た。また「たたかう農業」につ

## 森山発言等対話攻勢に対し反

対同盟は木の根用水―風車建設  
の貫徹と9・16闘争をうち出し  
闘う姿勢を示しぬいた。  
「9・16闘争では反対同盟十  
三年間の蓄積と団結、全ての戦  
力を示し抜き勝利に向けての展  
望をうち出す決意だ。『二期工  
事、手が出せない』と権力に言  
わしめるたたかいは強さをみせ  
つけてやろう！」9・16に向う  
決意を横堀部落の熱田副行動隊  
長は語る。二期工事をめぐり権  
力との政治的攻防はいよいよ重  
要な局面をむかえている。たた  
かいと団結の真価が問われてい  
るのだ。

## 9・16三里塚へ！

三里塚は秋のイネかり等収穫  
期に突入した。反対同盟は生産  
とたたかいは激闘の中で、9・  
16を迎えんとしている。来たれ  
三里塚へ！共に耕し、共に語  
り労働学を団結を強固にし9・  
16へ前進しよう！

# 埼玉、ステハりに 六カ所の家宅捜査

埼玉県警―川越署は七月五日、  
政治集会のステハリをしていた同  
志一名（女性）を不当にも逮捕した。  
そして、「屋外広告物条例・軽犯  
罪法」違反という名目で、十一日  
間もの勾留を行った。

そればかりではない。七月一七  
日―自宅、同二三日―職場、同二  
五日は自宅、事務所、友人宅を含  
む六カ所にガサ入れを行った。

更に権力は、釈放（七月二六日）  
後二度にわたって、同志とまった  
く関係のない友人を含む六名に  
任意出頭をかけたのだ。  
われわれは、絶対にこれを許す  
ことはできない。この異常な弾圧  
は、サミット警戒体制の埼玉版で  
あり、地域破防法弾圧体制の一步  
である。

すでに埼玉県警には、三月に昨

年三・二六闘争の指名手配者の逮  
捕と称して、集会場にだれ込み、  
その場にいた全員を拘束し、身体  
検査をしたという前歴がある。  
従って、これは偶然起ったもの  
ではない。明確に権力のたたかう  
人民に対する、日常監視や些細な  
ことを理由にしての逮捕―勾留―  
たたかいは庄殺への道を切りひら  
こうとするものである。

サミット体制の、地域における  
具体化してあるのだ。現にある  
職場では、管理職が、同志を呼び  
つけ「出頭状」を手渡すというこ  
とまでやっているのだ。

取調べ中、川越署公安共は「活  
動から足を洗い、止める」と繰り返  
返したと言う。あまつさえ「佐藤  
きたじやないか」と泣き声をだし  
た。この権力の悲鳴は、そのまま  
ブルジョアジムの声だ。  
われわれ埼玉地区労共闘は、三  
・二六戦士水野、佐藤同志が、自  
らの肉体をもって弾圧をはねのけ  
闘いつづけているように、敵の弾  
圧を許さずたたかひ抜き決意であ  
る。

県警―川越署のステハリ弾圧粉  
砕！